

今月の interviewer
大月短期大学
（左）なかしまあゆ 中嶋歩さん
（右）やまもとみさき 山本実咲さん



連載

夢を叶える
大月仕事人

心を励ます “絵本（芸術）の力”

“夢を叶える大月仕事人”の連載第6回目は、「絵本作家」で「市立図書館長」として活躍されている仁科幸子さんに、大月短期大学生がインタビューしました。



にしな さちこ
仁科 幸子さん

～プロフィール～
絵本・童話作家、市立図書館長 賑岡町強瀬在住
座右の銘：「子どもの本を書く人は、子どもの心を持った、成熟した大人でなければならない」by フィリップ・ピアス（英国の児童文学者）
大月のお気に入りの場所：深城ダム

「お仕事をはじめたきっかけは。」
「絵本作家」という肩書きですが、私の場合は絵本だけではなく童話作家としても活動しています。

「この仕事をする根本には、子どもの頃に習っていたクラシックバレエを通して体感した、「美しい世界」を追求し、人々に届けたいという想いがあります。」
子どもの頃から絵も好きで、進路は美術方面で考えていました。

その後、多摩美術大学に進学したのですが、在学中に体調を崩しました。その時、ドイツの絵本作家の翻訳本と出会い、精神的に救われたことをきっかけに「人の心に一番近づけるような、心を励ます仕事をしたい」「絵本作家になりたい」と思いました。



仁科さんのパートナー、ピーちゃんも参加！

芸術からくる美しさだと考えていて、その力を信じ、最終的に児童書の世界に進みました。

「本のストーリーはどのように考えているのですか。」
私自身ちょっと不思議で、夢の中で題名と絵、ストーリーが見えるんです。それは、いろいろな出来事を自分で経験して、さまざまな想いが集約されているからかもしれません。

私は子どもの頃、けがも含め多くの体験をしたので、子どもたちには物に触れたり、匂いを感じたりして、身体を使っていろいろな感性を磨いてほしいと思います。

「美しい世界」 にいることの 幸福を 分け与えたい



1. ご自宅はまるで絵本の中の世界！
2. 作品を見させていただく
3. お話自体が絵本の中の物語のよう

「館長を務める図書館での活動について教えてください。」
図書館は、本の貸し借り以外にもコミュニティづくりの中心としての役割があります。そのため、私は絵本作家という職業を生かし、他にはない展示、イベントなどを企画しています。一般の人が普段触れることのない非日常や楽しさを提供し、より豊かな生活の手助けになればと思っています。

「これから大月はどのように進むべきですか。」
大月には、これから人間が進んでいくべき姿があると思います。大月は約87%が森林です。森があることの大切さ、貴重さ、素晴らしさをもっと実感し、一緒に生きることが人間を豊かにしていくと思います。なので、自然に優しく緑とともに生きるということをもっと強く訴えて、戦略を練って欲しいと思います。

「私たち若者にメッセージを。」
何となく、若者に元気がないように感じられ、みんなと一緒でないと不安というような受け身の姿勢が見えます。

人と違うことは個性であり、他人の目を気にしていたら、あつという間に時間は過ぎてしまいます。「自分は何者なのか」「何をするために生まれて来たのか」

を、スマホを置いて空を見上げ、森の中を歩きながら、考えてみることも大事だと思います。

人生は、計算されたようには決まっていけないもの。「自分は何をしたら生き生きできるのか」、その辺りをヒントに自分探しをしてほしいと思います。

自分の可能性を信じ、地球規模で考えられる人になってほしいです。

人と違うことを恐れずに

インタビューの際に訪れた仁科さんのアトリエは、まるで絵本の中の世界のようなでした。
絵本作家として、そして図書館長としても活躍されている仁科さんはとても生き生きとしていました。

今回のインタビューを通して、多くの経験をする事、感性を磨くことが大切だと実感しました。これからの将来を担うのは、私たち若者です。人と同じことに安心するのではなく、「自分らしさとは何か」「自分がどうあるべきか」を私たちがこれからたくさん

の経験をしていく中で、見つけていきたいです。

